



令和2年度 第11号 令和3年2月10日

# 鶴 星

阿久根市立鶴川内中学校

校 訓

スクールコンセプト

ともに**夢**と**希望**を育む鶴川内中

協 自 自  
調 律 主

一 校 一 風

育てよう**花**と**心**と大きな**夢**を

## 校長室の窓から

『泣いた赤鬼』, コロナ禍の豆まき

校長 中山 武広

今年、2月2日が節分でした。実に124年ぶりとのことで、ニュースにもなっていました。節分といえば豆まきですが、子どもの頃、豆を投げつけて鬼を追い払うことには抵抗を感じていました。鬼は私にとってヒーロー的な存在だったからです。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

童話『泣いた赤鬼』のあらすじは次のとおりです。――赤鬼は人間と仲良くなりたくて、家の前に「心優しい鬼の家です。どなたでもおいでください…」と書いた立札を立てる。しかし、人間たちは疑い怖がり、誰一人として赤鬼の家に近づかない。赤鬼は信用してもらえないことを悔しがり、立札を引き抜く。そこへ親友の青鬼が来て、「ぼくが人間の村へ出かけて大暴れをする。そこへ君が来てぼくをこらしめる。そうすれば人間たちにも赤鬼はやさしいということがわかるだろう。」と提案する。作戦決行。青鬼が大暴れして子どもたちを襲う。そこへ赤鬼が飛び出し、格闘の末、青鬼を追い払う。作戦は大成功、村人たちが赤鬼の家に遊びに来るようになった。赤鬼は人間たちと楽しく過ごすも、あれ以来、青鬼が一度も遊びに来ないことが気になった。青鬼の家を訪ねると、戸は閉ざされ、張り紙があった。「赤鬼くん、人間たちと仲良く暮らしてください。ぼくが君とつきあっていて君も悪い鬼だと思われるかもしれません。なので、ぼくは旅に出るけれどもいつまでも君を忘れません。さようなら、体を大事にしてください。ぼくはどこまでも君の友達です。」との書き置きを読んで赤鬼は号泣する――という物語です。子どもの頃の私にとって、鬼のイメージは、ここに登場する赤鬼と青鬼です。決して悪者ではなく心優しい存在です。特に、青鬼に対しては、優しさと同時に心の強さも感じられ、幼いながらに尊敬の念さえ抱いたものでした。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

不朽の名作の結末を変えることはできませんが、今、大人目線から、青鬼が自ら姿を消すこと以外に、もっとよい解決策がなかったかと考えることがあります。よりよい解決策の鍵は、案外、村人たち（人間たち）が握っていたのではないのでしょうか。

物語の中で、村人たちは赤鬼の立札を見たとき、何の根拠もなく疑い怖がっています。この「根拠なく疑い怖がる心理」は、現実世界の私たちの心理でもあると考えます。

コロナ禍において、感染者やその家族・勤務先等に対する誹謗中傷など、誰かを悪者にして追い詰めようとする風潮がありますが、それは、「根拠なく疑い怖がる心理」の無自覚な発現のように思われます。「正しい理解」と「思いやりの心（行動）」を豆にして、「根拠なく疑い怖がる心理」を我が心中から追い出したいと思います。

## 行事予定

月	日	曜	2月～3月の主な行事
2	13	土	立志式・記念講演9:25～
	16	火	三者面談(～19)
	19	金	PTA 役員会
	26	金	1・2年学級PTA・授業参観
3	1	月	安全点検日 生徒集会
	8	月	全校朝会
	11	木	送別球技大会
	15	月	全校朝会 同窓会入会式 卒業式予行
	16	火	第74回卒業式
	17	水	公立高校合格発表
	22	月	生徒集会
	23	火	防災訓練
	25	木	修了式 辞任式
	26	金	小中連絡会
29	月	入学生保護者説明会	

2月13日(土)の立志記念講演については、家庭教育学級最後の活動となります。全学年保護者対象です。是非、ご参加ください。

本市での新型コロナウイルス感染症発生に伴い、感染拡大防止のため、3/16(火)の第74回卒業式は、卒業生、在校生、卒業生保護者のみの参加で行います。

従いまして、ご来賓の卒業式の御臨席を御遠慮申し上げることといたしましたので、御理解とご協力をお願いいたします。

努力目標

生活習慣の確立を図ろう。

一事徹底

服装の乱れに気を付けよう。

## 学級活動研究授業

1月19日(火)  
立志式への取組を授業公開しました。



地区の新任教諭11人が集まり、2年生の学級活動にて、ゲストティーチャーの人生を興味深く聞き、キャリアプランニングを見直し、中学校で身に付けたい力や取組を見いだしました。立志式の発表が楽しみです。

## 入学説明会

1月22日(金)  
学校紹介を2年生が行いました。



技術・家庭(技術分野)の授業で学校紹介のプレゼンテーションを制作し、国語の授業で表現を豊かにした学校紹介をもとに、2年生全員が参加者の保護者・児童のみなさんに説明しました。和やかな雰囲気でした。

## 立志式記念遠行

1月23日(土)  
PTA主催で藤川天神にて祈願しました。



藤川天神にて立志の祈願をしました。五色公園までの遠行予定でしたが、あいにくの天気のため、EVスポットで折り返す約6キロの道のりを全員が完歩しました。2月13日(土)は立志記念講演があります。他学年の保護者の皆様も是非ご参加ください。



★私立入試を終え、卒業を目前に

あまり詳しくなくても、ピカソは「抽象的な絵を描いた人。ゲルニカを書いた人。すごい値段の絵を描いた人。」というイメージをもつ人も多いだろう。ある時、友人の美術の先生が「ピカソは、抽象的な絵を描くが、実は写実的なデッサンはすごくうまい。メチャクチャうまい。そういう基礎があってこそ、抽象的な、創造豊かな絵が描けるんだと思う。」と語ってくれたことを思い出す。ピカソは、天才画家として名高いが、少年時代、ひと冬の間、ストーブを燃やせるぐらい膨大な量の紙でデッサンの練習をしていたと言われている。

ある研究者が各分野の「天才」と言われる人を多面的に研究した結果、「天才」と「そうでない普通人」との違いは、素質ではなく、「それにかけた時間」の差でしかないと述べている。人は「天才に生まれる」のではなく、「天才になる」という表現が正しいといえる。

右のデッサンは11歳の時のピカソのデッサン。数多く残っている一つだが、有名な彼の作風からは想像もできない繊細なものだ。あの極端な画風であるキュービズムの作品を書くために彼はこんな緻密なデッサンを若い頃から積み重ねていたのだ。画力というのはすべての美術作品の礎となる。いくら「自分の作品はこれが個性だ」といっても基礎画力の上に積み上げられたものでなければ、それはただの言い訳にしかならない。だから、一流デザイナーは声を大にして言っている。「もっともっとデッサンをしなさい!」と。その話を聞いて、なるほどと思う。



ピカソ 11歳の時の作品

本題だが、基本的な学びをおろそかにしてはならない。何百枚、何千枚描くデッサンと同じように、ひたすら取り組むことができるならば、限りなく自分の夢に近づく一歩になる。たとえば、高校入試に昨日訂正をした同じ問題が出たり、わからなくても何か書いた答えが正解だったりしたときは“ラッキー”でなくて努力があったからだと考えたい。言い換えれば、当たり前前を当たり前前に過ごし、着実に積み重ねるといった基本をこの中学生の時期に身に付けたい。その基本とは、入試のためだけでなく、人生を生き抜く心構えであり、なぜ生きるかという問いに対する姿勢である。何事も日々の積み重ね、諦めない気持ちが結果につながると思いたい。

“できる”人間がなぜできるか…才能じゃない。あきらめないからだ。キャリア教育の一環で講話いただいたDAC代表のアニマル石川さんが「あきらめたこともある。逃げたこともある。でも、あきらめなかったことが今の自分」とおっしゃったように。努力していることに気づかない人でありたい。光の中にあれば光だと感じないように。光あるうちに光の中を進もう。